

組 番 名前

【2年生で学習する古文】

1 「枕草子」 教P

116

1 次の一線部の歴史的かなづかいを現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(1) 今は昔、竹取の翁と①いふものありけり。

①

野山にまじりて竹を取りつつ、②よろづのこと③使ひけり。

②

③

名をば、さぬきのみやつこと④なむいひける。

④

便覧 P54 「竹取物語」

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと⑤うつくしうてゐたり。

⑤

(2)

春はあけぼの。⑥やうやう白くなりゆく⑦山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

⑥

⑦

夏は夜。月のころはさらなり、闇も⑧なほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

⑧

便覧 P64 65
枕草子

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと⑨近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、⑩飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

⑨

⑩

【2年生で学習する古文 2 「徒然草」便覧P 76

一次のー線部の歴史的かなづかいを現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。
 ※ふりがなの部分を現代かなづかいに直す問題もある

① 高名の木登りと②いひし③をのこ、人をおきて、高き木に登せて④梢を切
 らせしに、いと⑤危ふく見えしほどは⑥言ふこともなくて、降るときに軒長ばかり
 になりて、「過ちすな。心して降りよ。」とことばをかけ侍りしを、「かばかりにな
 りては、飛び降るとも降りなん。いかにかく言ふぞ。」と申し侍りしかば、「そのことに
 ⑦候ふ。目くるめき、枝危ふきほどは、己が恐れ侍れば申さず。過ちは、やすきところ
 に

なりて、必ずつかまつることに候ふ。」と言ふ。

あやしき⑧下臍なれども、聖人の戒めに⑨かなへり。鞠も、難きところを蹴出だ
 してのち、やすく⑩思へば、必ず落つと侍るやらん。

(第一〇九段)

⑨	⑦	⑤	③	①
⑩	⑧	⑥	④	②

歴史的かなづかいの復習と、2年生で学習する古文について
 大まかな内容を知っておきましょう。

【2年生で学習する古文 3 「平家物語」】 教P

1 次の一線部の歴史的かなづかいを現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、①をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ②揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、③願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を④向かふべからず。いま一度本国へ⑤迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせ⑥たまふな。」

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつびいて⑦ひやうど放つ。小兵と⑧いふぢやう、十二東三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、

⑨ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

「御定ぞ、つかまつれ。」
と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつびいて、しや頸の骨を⑩ひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり

「扇の的」

⑨	⑦	⑤	③	①

⑩	⑧	⑥	④	②